

本試題是否可以使用計算機： 可使用， 不可使用（請命題老師勾選）

試將下列日文文獻譯為中文

(25%) 1、逆説的なことに、そうした結合は、描き出された境界線とともにある。病が言語化される時、あらゆる位相において、隔てを生み出す境界線が欲望され、その境界線は、言葉を分断し、文字として可視化させる。こちら側から分節化された言葉は、ゆるやかに親和してゆくが、あちら側にあるはずの、病という現象を身体に招き寄せる「病毒」「バチルス」が、いかなる境界をも容易にすりぬけ、境界線を溶融させてしまうので、実際のところ、言葉の連なりの上にあるのは、実体として想定可能な境界線ではなく、境界が引かれようとする瞬間なのであり、病をめぐる語りに関しては、境界とは、水の上に描かれた波紋と同様、現出するとともにはかなく消えゆく何ものでしかあるまい。隔てを生むべくして境界は繰り返す描かれようとするのだが、それは何か描かれた力の痕跡としてのみそこにあり、そこでは切断と結節とが時を同じくして読み手の目に映じている。(25%)

（内藤千珠子「病う身体——「血」と「精神」をめぐる比喩、『ディスクールの帝国——明治三〇年代の文化研究』、東京：新曜社、2000年4月、57頁）

(25%) 2、国民国家における戦争は、さしあたり敵か味方か、という単純明快な線引きを欲望する。そして、きわめて恣意的な線引きの結果として析出された表象は、メディアのなかで転写・複製され、紋切型となってあたりを乱舞する。亀井俊介は、日清戦争が「戦勝という国民的矜持を背景に、世界に対して存在を主張しうる国民文学」の「可能性と方法の探究をするナショナリズム文学論を花咲かせた」と書いているが、それらの文章のすべてが前提とする発想——その国家に固有の精神の反映としての「国民文学」——が、同時代に流通する紋切型の表象を踏襲していたとしても、まったく不思議はない。事実、『帝国文学』第一号の巻頭を飾った「日本文学の過去及び将来」（一八九五・一～三）の井上哲次郎は、「外国より侵入せる」さまざまな潮流にも決して見失われることのなかった「日本固有の思想」なるものが存在し、それは「想像雄偉」「氣象快活」「理想純潔」の三要素なのだと言わずにはおれなかったのである。(25%)

（「与謝野鉄幹と＜日本＞のフロンティア」、『ディスクールの帝国——明治三〇年代の文化研究』、東京：新曜社、2000年4月、98頁）

本試題是否可以使用計算機： 可使用， 不可使用（請命題老師勾選）

- (25%)3. かうしたひそやかさのなかで、若い村娘がもう世から忘れられはて、こゝにさびしく埋められてゐるといふことに、ふと秋は哀憐の情を覺えた。
なぜだが、私は、これはきつと清純な處女に違ひないと思ひこんでしまった。いや、私はほとんど、確信のやうに、それに決めこんでしまったのだ。
誰も知らないこの村娘の死、そしてみすぼらしい墓のために、私は墓銘碑のつもりで、なにか書き残さうと思つた。(25%)

—龍瑛宗「村娘みまかりぬ」、『文藝臺灣』創刊號、
臺灣文藝家協會、1940年1月、2~3頁より—

- (25%)4. 前線と銃後が発した言葉のうちでも、これから本格的な考察がなされなければならないもっと重要なひとつは、軍歌である。それが、前線においても銃後においても戦意昂揚の最大の武器となったからばかりではない。軍歌の歌詞としてそのまま使えるような中野繁雄の戦線民謡や戦線詩選にもあらわれているとき、誤解の余地のない意味内容のゆえばかりではない。軍歌こそは、相互に浸透しあう銃後と前線との自己表現であり、それどころか、みずから前線となっていく銃後の自己表現だったからだ。(25%)

—池田浩士『「海外進出文学」論・序説』、
インパクト出版会、1997年、323頁より—